

む さ し おん せん かい はつ

## 武蔵温泉の開発



▲温泉浚渫碑（武蔵寺の山門をくぐって右）

健康ブームの先駆けとして、武蔵温泉（現二日市温泉）はよく知られた湯治場でした。この温泉は、元禄（1688～1703）のころ4ヵ所で湧き出していたことが『筑前国続風土記』（黒田藩儒学者・貝原益軒らの著作）に記録されています。それから百年後、寛政年間の『筑前国続風土記附録』の絵図には「湯町」が鷺田川を挟んだ町並みとして描かれています。そこに初めて「薬師湯」と「留湯」の名を見ることができます。さらに『御笠郡明細記』（1802年）の武蔵村の項には湯坪6ヵ所とあり薬師湯、御前湯、助湯、川湯（3ヵ所）が湯坪の内訳としてあげられています。留湯

は、一般の人の入湯を禁じた温泉で、黒田藩主専用の温泉「御前湯」のこと。助湯（介湯）はその補助的な施設と考えられます。川湯は、文字通り鷺田川畔に湧き出した公衆浴場で、湯治客などが入った温泉です。薬師湯は、その側に祀った薬師如来にちなんだ古来の温泉と考えられます。ここで近くの武蔵寺に伝わる同寺縁起絵図（福岡県指定文化財）に登場する開祖藤原虎磨との関わりが出てきます。

この温泉地に開発の波が訪れたのは1889年（明治22）、九州に近代的な交通革命をもたらした九州鉄道（現在のJR）の開通でした。日本で初めて鉄道が東京・新橋と横浜間に開通して17年後のことです。これに目をつけたのが博多の豪商渡邊與三郎（引退して與八郎）でした。與三郎は地元富豪の谷彦一（鉄道誘致の功労者）と組んで、江戸期の旅籠とは違う温泉街づくりに乗り出しました。温泉旅館延寿館のほか大坂屋、港屋、大丸館などがオープン。與三郎は現在の温泉センターのような「薬師湯」を開設、高級貸し部屋のほか射場、玉突き場も備えていました。この大きな開発から、旅館街が「内湯あり」を看板に泉源掘削を競ったため、泉源の低温化を招き、



▲武蔵寺の山門



